伝統芸能における遠隔教育システムの意義
Case Study of Practice of Tea Ceremony through Distance Education

古賀広志†　　柳原佐智子‡
Hiroshi Koga†　Sachiko Yanagihara‡
†関西大学　総合情報学部
‡富山大学　経済学部
† Faculty of Informatics, Kansai University
‡ Faculty of Economics, University of Toyama

要旨

本稿の目的は、ICT を活用した遠隔教育の意義について試論を展開することにある。そのために敢えて ICT による遠隔教育に不向き（対面による教育が基本）と考えられる茶道に注目する。具体的には、遠州流茶道壷中庵・堀内宗長氏の展開する Web 稽古を取り上げる。

そこで本報告は次のような構成をとる。第一に、伝統芸能の稽古の概念と ICT による遠隔教育における知識観（学習観）について概観する。第二に、ICT を活用した遠隔教育の事例研究を通じて、その成功要因を明らかにする。第三に、技術的側面ではなく組織的要因が重要であるという立場から、ICT を活用した人材育成の課題を論じる。

1. はじめに

近年、遠隔教育システムがとみに注目されている。たとえば総務省は、実地指導主体であった PBL を「遠隔地での実践指導や遠隔地間の協働学習」のために活用すべくシステム開発に取り組んでいる[1]。あるいは、シリアスゲームを利用した「リアリティ豊かな体験学習」、ゲーミフィケーションを実践できると言われている[2]。このように遠隔教育ないし e-learning は大きな変貌を遂げつつある。

そこで本報告では、ICT を用いた遠隔教育システムの意義について試（私）論を展開してみたい。

ただし本報告では、大学教育や企業のナレッジマネジメントシステムではなく、あえて対面による教授方法を基本とする「茶道」を取り上げることにしたい。後述するように、茶道の稽古は、基本的に対面による稽古が中心となる。それゆえ、どちらかと言えば、遠隔教育システムには最も縁遠い存在と考えられる。そのために、茶道の遠隔教育システムの実践について考察を加えることは、従来の人材育成システムとは異なる知見を得られると期待できる。そこで、本報告では、遠州流茶道壷中庵・堀内宗長氏が展開する「WEB 稽古」を事例として取り上げる。

結論を急げば、われわれは、遠隔教育システムの意義は「ポータブルな知識の補強増大」ではなく「個人としての立ち居振る舞いの変容」にあると考えている。このような主張は、遠隔教育システムを組織市民行動の誘発装置であると指摘した柳原[3]を基礎にしている。ただし柳原[3]においては、教授者のテレワーク、受講者の信頼形成ないし顧客満足の視点からの考察に焦点がおかれている。本報告では、従来の伝統的な遠隔教育システムを含め近年のナレッジマネジメント論で注目されている「実践知」の概念と伝統芸能における稽古で体得される知の相違、伝統芸能における対面の稽古と WEB 稽古の相違に注目することで、遠隔教育システムの意義について考察を加えることに焦点をおきたい。

このような目的のために、本報告は次のような構成をとる。第１に、伝統芸能の稽古の概念と ICT による遠隔教育における知識観（学習観）について概観する。第２に、ICT を活用した遠隔教育の事例研究（堀内氏の展開する WEB 稽古）を通じて、その成功要因を明らかにする。第３に、技術的側面ではなく組織的要因が重要であるという立場から、ICT を活用した人材育成の課題を論じる。

2. 実践の知と稽古の知

本節の課題は、WEB 稽古における知識観ないし学習観を検討することにある。そこで以下では、伝統的な遠隔教育システムや経営情報論におけるナレッジマネジメントで議論される「実践の知」という概念をキーワードに、伝統芸能（茶道）の稽古における教授内容の特徴について考察を加えていく。

2.1. 実践の知

それでは「実践の知」の概念を概観することから議論を始めよう。

このとき「実践の知」の概念は、CAI や専門家システムに対する批判として提唱されたものである[4]。その急先鋒はドレイファスらである。彼らは「コンピュータは、反復練習形式や分岐型形式の知識獲得において有効であるが、それでは優秀なビギナーを生み出すだけで、本当の知識をもった専門家育成には貢献できない」と批判している[5]。たしかに熟練者ないし専門家は知識を意識して行動してない。むしろマニュアルを絶対視することなく柔軟かつ臨機応変に振る舞うことが、熟練の「勘どころ」と言えよう。繰り返し強調すれば、専門家の知恵とは、あたかも即興演奏のように譜面（マニュアル型知識）からの逸脱もいとわない姿に見いだすことができるのである。この限りにおいて、CAI による学習は「マニュアル習得」の段階に焦点をあわせたものにすぎず、専門的知識獲得（専門家育成）に役立たないどころか逆に障碍となると、ドレイフェスらは主張するのである。事実、マニュアル的知識の定向進化は「化石化」や「熟練の煉獄」として知られている[6]。

また佐伯[4]は、「生きた知識」という観点から、学習は「知識の量ではなく、その機能であり、生かし方」に委ねられているゆえに、CAI は「知識の生かし方に直結するものでない」と批判している。

それでは「実践の知」とはいかなるものであろうか。ここでは二つの具体例をもとに、その考え方を説明しよう。

まず、西堀栄三郎の「ボルトの代替品」のエピソードを取り上げよう[7]。第一次南極観測隊の越冬隊が初めて遠出したとき、雪上車の無限軌道＝履帯を留めるボルトが脱落し故障するという事故が起きた。西堀隊長は、袋ナットやドライバー、トーチバーナーとハンダといった手持ちの道具を用いて「ナットの代替品」を作り、応急処置をした。しかし、ナットの代替品の「緩み」が気がかりだった。彼は、応急処置を終えた休憩中に飲んだ「紅茶の葉」に注目する。それを雪に放り込み、シャーベット状の混合物を作ると応急処置した代替品ナットの周りに塗り付けた。氷点下の環境では、紅茶シャーベットは強力な接着剤として機能した。このような当意即妙な対応が「実践の知」の本質に他ならない。ナレッジマネジメント論で注目された米国陸軍の AAR（After Action Review）は、まさに「当意即妙の知」の意義を再確認したものだ[8]。

次に、AED（自動体外式除細動器）の使い方に関するエピソードを紹介したい。行岡 [9]は、AED の使用方法を知っているかどうかは「〇×の試験や論文記述試験さらに口頭試問でも評価できない」し「コンピュータ内蔵の訓練用（シミュレーション）人形による実技でも評価はでき」ないという。そうではなく、「実際に駅や百貨店の通路で、野次馬が多くいる状況で使えて初めて“知っている”」ことになると主張する。つまり、雑踏の中で勇気を出して実践に踏み出してこそ「生きた知識」であり「ほんとうの知識」なのだ。それは、状況に応じた当意即妙というよりは、決断を伴いつつ、自らが投企された「いま・ここ」の場面を知ることに近い。つまり、「世界・内・存在」としての立ち居振る舞いの中に知識があると考えられる。シリアスゲームが注目される所以である[2]。

以上の２つのエピソードから「実践の知」は、プラトンの定義する「正当化された真な信念」というよりも、「勇気と決意」を伴う「実際に役に立つ＝利」に関わる性質を帯びていることが分かる。

2.2. 稽古の知

次に本稿では、数ある伝統芸能のうち茶道の稽古に焦点をあて、そこで学習される知の性質について考察を加えたい。このとき特に留意したいのは、茶道の稽古における知の特殊性である。そこでわれわれは、修行や徒弟制に関わる知の通俗的理解として、稽古＝内弟子による奉公[10]、徒弟＝正統的周辺参加[11]という２つのキーワードを手がかりに、稽古の知の意義を探ることにしたい。

まず、「稽古＝内弟子による奉公」というべき誤解を取り上げよう。誤解を恐れずに単純化すれば、伝統芸能の修行ないし稽古と言えば、「内弟子になり、師匠の自宅の掃除や師匠の鞄持ちを行う」毎日を過ごし、かけられる唯一の言葉は「いいから黙って言われた通りにしなさい」だという印象が強いのではなかろうか。あるいは「指先に目があるように踊りなさい」のような「わざ言語」による指導を特徴とする身体性と深く関わる学習というニュアンスを抱くかもしれない。

しかし、茶道の場合は、このような通俗的印象とは異なる稽古が実施されていることが多い。

茶道における稽古の第一段階は、お点前（お茶を点てる手順）や茶室での作法などの基本動作の体得である。そのために、お点前の基本動作（袱紗捌き、茶筅通し、茶器・茶杓・茶碗の拭き方、茶巾のたたみ方など）を分割して稽古する「割り稽古」が中心となる。茶道の稽古は基本的に 1 対 1 であるが、この段階では複数の弟子が同時に稽古を受けることがある。

基本動作を体得できれば、お点前を中心とする稽古が 1 対 1 で行われる。複数の弟子が同席する場合は、一人の弟子の稽古中に他の弟子は客の役割を果たすことになる。稽古を重ねていく中で、季節毎のお点前、炭点前（炉ないし風炉に炭を置くための手順）などの作法を学んでいく。また継続して稽古をする中で、「師範」などの「免状」をとることができる。

さらに稽古の場では、作法などの具体的な所作だけでなく、「床のしつらえ」「掛け軸の意味」「花や香」「道具」「茶室と庭」「茶」「菓子」「会席料理」「和服」など日本の伝統文化を学ぶ機会を与えられることが多い。つまり、和の文化（最近の流行語を用いれば「おもてなし」の心）を総合的に学習する機会が、茶道の稽古に凝縮されている。

そして、これらの稽古における指導は、日常言語による具体的な指示が多い。たとえば「お茶碗は正面より左に」、「柄杓の柄はもっと手前を持つ」「そこは左手じゃない」などの指示がなされる。稽古場では、抽象的な「わざ言語」ではなく、具体的内容を日常言語による指導が基本と言える。もともと「わざ言語」は「華道」をもとに提唱された概念であることに鑑みれば、華道と茶道の指導法の相違としても興味深いことと思われる。

次に、徒弟制における学習モデルとして有名な「正統的周辺参加」について概観しておこう。周知の通り、正統的周辺参加における十全的参加は、実践共同体の参加者であるというアイデンティティ確立を目指すことである。しかし、それは弟子が親方になるということではない。実践共同体の目指す価値を血肉化し、それを立ち居振る舞いとして具現化するという意味において、十全的参加なのだ。

このとき留意すべき点は、十全的参加と「親方を目指すこと」は異なることだ。むしろ「神は細部に宿る」と言われるように、実践共同体の価値は、その参加者ひとり一人の一挙手一投足に具現化されるのだ。この限りにおいて、茶道の稽古は正統的周辺参加における十全的参加を目指すものと理解できる。

稽古で学習される内容は、具体的な型ではなく、「茶道の精神」いわば「おもてなしの心」なのだ。男性社会の中で構築された茶道が女性の花嫁修業として位置づけられた背景には、このような「十全的参加」の意識が深く関わっているように思われる。

もちろん、最近では女性の花嫁修業そのものの意識が薄らいでいることもあり、総務庁統計局社会行動調査によれば、女性全体に対する茶道稽古者の比率は減少する傾向にある。他方、男性のそれは横ばいであるために、男女比を見れば、稽古者における男性率は増加する傾向にある。男性の稽古者の場合は、海外勤務を契機に日本文化を体得したいなど「総合的な文化芸術の体得」を目指す鍛錬として稽古を位置づける人が多いと言われる。このような男性の場合も、文化の具現者という十全的参加を目指すと理解できる。

なお、弟子の進むべき今ひとつの道もある。それは、教授者（徒弟での親方）を目指すという方向性である。ただし、入門当初から教授者を目指す人は極めて少ないと言われている。さらに、稽古を通じて茶道に陶酔し、師範の免状を取得した場合でさえ、教授者として生計を立てていくことは困難である。かつて「花嫁修業」としての茶道が盛んな頃であっても、教授者の多くは兼業もしくは専業主婦であり、時間や設備面で茶道教授を生業にすることは極めて困難であるためだ（そのため、教授者を目指す人の多くは、その母や祖母が教授者であるなどの条件が整っている場合が多く、そのことが世襲や徒弟制度の誤解を招いている点は否めない）。なお、当然ながら、教授者を育成する場合は、稽古は細かい点まで厳しく指導されることになる。この場合、冒頭で指摘した「掃除や鞄持ち」を通じた修行を何らかの形で得ることで、さらにレベルの高い教授者を目指すこともある。いったん教授者になったとしても修行が完成するわけではない。この限りにおいて（自らの理想とする）教授者の姿に近づくという十全的参加が行われていると言えよう。とはいえ、本報告では、茶道の教授者育成プログラムではなく、一般の

入門者（弟子）に対する教授とりわけ遠隔教育システムに限定して議論を進めていく。

そして一般の入門者において、稽古の目的は所作を学ぶこと、さらには「和の文化」に親しむ（あるいは「おもてなし」の心を学ぶ）ことである。そこで体得される「稽古の知」とは、和の文化に親しむという実感である。言葉を換えれば、それは具体的な所作の体得を通じて得られる感覚である。

このような稽古の知は日常生活の中に彩りを与えるという意味では（役に立つ＝生きた）「実践の知」であり、それを体現できなければ意味がないという限りにおいても「実践の知」である。

ところで「稽古の知」は「型」を学ぶという意味では「マニュアルの知」でもある。マニュアルの知は、そもそも当意即妙や臨機応変と形容される生きる知（状況的認知ないし「見立て方」の知）の対極に位置づけられるものである。そのために、稽古の知は、マニュアルの知と実践の知の相異なる性質を兼ね備えるというパラドクスを内包することになる。この点に留意しつつ次節では、茶道における遠隔教育システムの事例を紹介しよう。

3. 茶道における遠隔教育システムの事例：WEB 稽古

本節では、遠隔教育システムの意義を考察する手がかりとして、茶道の稽古の事例を取り上げる。前述のように、茶道の「稽古の知」はマニュアル知と実践知の両面を内包する知である。そのために、茶道における稽古の遠隔教育システムの事例を検討することは、マニュアル的学習と実践知の体得の双方に対して何らかの示唆を得られると期待できるだろう。

さて、対面教育を基本とする茶道の稽古において、遠隔教育システムを利用した実践事例は、おそらく堀内氏の「WEB 稽古」だけであろう。そこで事例を検討する前に、堀内氏について簡単に紹介しよう。

堀内氏は、25 歳で遠州流茶道に入門、遠州茶道宗家に内弟子兼秘書として修行を重ねた後に独立し、壷中庵・宗長の号を得て、多方面で活躍する茶人である。著作やメディア出演も多く、茶道の枠を超えた文化活動にも精力的である[12]。

現在、堀内氏は、首都圏を拠点に複数の稽古場（日本橋、神楽坂、吉祥寺、町田、横浜）を持つ茶道遠州流の教授である。稽古を行う中で茶道や関連分野のイベントの企画・運営にも勢力的に携わっている。また茶人の中でも、いち早く ICT 活用に注目し、1996 年に NIFTY-Serve 電子会議室上に誕生した「茶の文化フォーラム」の中心的役割を担ってきた（後に同フォーラムは閉鎖）。また、稽古場＝教室同士の交流を持ち、その連絡ツールとしてメーリングリストを作成している（第 1 回調査の時点で ML 会員は 120 名であった）。さらに、ソーシャルメディアによる情報発信も積極的で、活動内容に応じて名前（茶人・堀内宗長、アーティスト・堀内ギシオ、茶道の枠を超えた文化人・堀内議司男）を使い分けている。

ちなみに実際の稽古は稽古場毎に月 2〜3 回行われている。稽古は（筆者達の子供時代に体験した書道教室のように）稽古場の開いている時間帯であれば、弟子の都合の良い時間に出席すればよい。そのために、稽古人数が日によって異なり、人数が多いときは、23 時頃までかかることもあるという。

弟子は老若男女、20〜70 代の多岐にわたる点も特徴である。なお、日本橋では「男性のための茶道入門」を開催している。日本橋の稽古場の他の教室や神楽坂の稽古場でも、男性の弟子が多い。そして実は男性の弟子が多いことが WEB 稽古の遠因のひとつとなる（もちろん、前述のような積極的 ICT 活用などの進取性に富む堀内氏自身の性格も重要な遠因である）。

Web 稽古の直接的契機は、弟子の海外赴任であった。働き盛りの男性の転勤は不可避である点を否めない。国内であれば、同流派の師を見つける、あるいは紹介してもらうことで、稽古を継続することも可能である。しかし、海外勤務の場合（件の弟子の場合はフランス赴任であった）現地での師を探すことは困難を極めた。その上、通い慣れた師匠との関係性を継続したいという弟子の想いが強く、弟子側から自発的に WEB を通じた稽古の申し出があった。

かくて、意図せざる結果として WEB 稽古が誕生する。当初は iPhone で稽古をつけていた。稽古は「極力、口だけで」指導する。それゆえ、師の顔が見える必要はない。弟子の点前が見えるだけで良い。システム要件は極めて単純だ。その後システム構成は、IP ビデオ通話が可能なフリーウェア Skype ™ の最新版が利用できる環境であれば良いということになる。ただし、WEB カメラの解像度は高い方が良いと

している（あえて問題点を指摘すれば、カメラの切換操作に慣れが必要であることだ）。

さて、WEB稽古では弟子が点前をする様子をWEBカメラで撮影する。その映像を堀内氏が自宅で見ながら、必要に応じて声をかけることで稽古をつける。まさに「365日・24時間、お茶の間稽古」である。なお工夫している点として、2台のWEBカメラを利用し必要に応じて手元の拡大画像に切り替えることで、細かい所作についても稽古をつけることができるようにしている。つまり、稽古場での点前の映像を共有することで、師の前での稽古という臨場感と緊張感だけでなく、手元映像を活用することで稽古の質を実際の稽古に近づけているのだ。

ただし、受講生の都合の良い（海外赴任者が勤務を終え帰宅してからの）時間は、時差の関係で深夜になる場合が多い。師であり教授側の堀内氏にとっては負担も少なくない。しかし、通常の稽古場での稽古に影響を与えずに弟子を持てること、大人数でないことなどから、WEB稽古は大きな魅力を持つという。また、堀内氏は「弟子からみても WEB 稽古の反応は良いと認識している」と言う。弟子側の理由により生じた地理的懸隔を圧縮し稽古の継続が可能となるからだ。

なお第1回目のインタビュー時点では、WEB稽古の弟子はフランスだけでなくシンガポール、ニューヨーク、ベトナムに在住していた。このとき、海外赴任先の自室での稽古は当然ながら正式な茶室ではない。そこで、堀内氏は海外で入手しにくく代用品を用意しにくい茶筅等を持参するように指導していた。しかし、炉等の道具さらに茶室は、あくまでも「見立て」による稽古である。

また、稽古の料金体系が大変に興味深い。ともすれば、お稽古事では弟子は師に差し出すのは「料金」ではなく「月謝」つまり「お礼」であると考えられることが多い。ところが、WEB稽古では「月謝」ではなく「回数制の料金体系」を設定した。すなわち30 分 2000 円とした。通常の稽古は1 回約 1時間で 4000 円となる。また、現在では6回10000円という回数券という制度も導入している。

4. 茶道の遠隔教育システムの意義

次に、WEB稽古の成功要因について考察しよう。このとき手がかりとなるキーワードは「地理的懸隔の圧縮」「見立て」「料金体系」の３つである。

第一に、「地理的懸隔の圧縮」とは、上述の通り、いつでもどこでも稽古ができるという点である。もちろん、時差の関係もあり、いつでもできるというのは言い過ぎかもしれない。しかし、WEB 稽古は,文字通り「つながり」を担保することで、「師弟関係の継続」を実現できる。視点を変えれば、師弟関係ないし絆を継続する上での「接続装置」が、遠隔教育システムだと位置づけることができる。したがって、遠隔教育システムの第一の成功要因は「つながること」にあると思われる。

第二に、「見立て」とは、茶道に由来する言葉で「物の本来あるべき姿ではなく、別の物として見る」ないし「あえて定石を外して面白みを出すための遊び」という意味である。熟練者の「見立て」は粋な振る舞いと考えられる。上述の「茶葉＝ナット」の例は、まさに当意即妙の「見立て」である。問題解決に向けた「器用仕事」としての「見立て」は「生きた知識」の本質と言えよう。

しかし、何でも見立てればよいという訳ではない。季節のお手前など茶道では道具が重要な役割を担うために、道具にあわせた所作の稽古をしなければ感覚的にうまくいかないことが多いからだ。それゆえ「茶杓がないから柄の長いスプーンで」というような「一時しのぎの代用」で済ませる行為は不適切となる。この限りでは、WEB 稽古における「見立て」は、「当意即妙」よりも「一時しのぎ」のニュアンスが色濃い。それにもかかわらず、堀内氏が「道具の代用でもよい」とする WEB 稽古が成功している背景には、「道具がないから稽古を継続できない」から「十分な道具がなくても師事し続けたい」という「師弟関係の絆の強さ」を垣間見ることができる。この「信頼関係」が茶道における遠隔教育システムの第二の成功要因と言えよう。

第三に、「料金制度」である。出席した回数だけの支払という制度そのものはカルチャーセンター等で採用されることもあり、それほど珍しいものではない。しかし、堀内氏が月謝でない料金制度を採用する背景には、「伝統的な師弟関係が崩れて」いること、親に言われて稽古に来る時代ではなく「自分のお金を払って来ている」自発的な弟子が増えてきたために、「師匠の方が弟子に歩み寄って」「休んだら月

謝割引も」という柔軟な発想（あるいは従前の師弟関係をウェットとすれば、ドライな師弟観と言えよう）が見え隠れしている。堀内氏は「事情があって稽古にこられないから、事情はいちいちきかない」と言う。このようなドライな師弟観が遠隔教育システムの第三の成功要因である。

5. まとめ

我々は、上で「稽古の知は、マニュアル知と実践知の相異なる性質を兼ね備える」と指摘した。つまり、稽古は、お点前の手順の体得という一見するとマニュアル知の体得だけでない。むしろ、稽古の目的は、お点前の手順の向こう側に見え隠れする「おもてなしの心」の体得と言えよう。そして、堀内氏も指摘するように、「お茶の中にはすべての日本文化が入っている」ために「一生もの」の修行である。そのために、稽古の継続が重要である。しかし、弟子にとって稽古の継続は意外と難しい。その弟子の悩みを堀内氏は包み込むように解消している。彼は、弟子に対して「年に一回でも出てくれれば、お茶だけ一服のみにきてくれれば、と割り切ってしまえば楽」だと言う。さらに、「意識するとつらいけど、意識しないで常につながっている」押しつけがましさのないつながり方が大事であり「切らなければいつか戻ってくるかもしれない」と指摘する。これらの言葉の背後には、弟子に対する信頼感を垣間みることができよう。

さて、このような精進を重ね「一生もの」の知を体得するためには、稽古の継続すなわち「師弟間の緩やかな紐帯の構築」が不可欠である。そして「師弟間の緩やかな紐帯」が WEB 稽古で獲得される知の中核的要素ではなかろうか。つまり、WEB 稽古の知とは「師とつながっているという感覚（師弟感)」ではなかろうか。そして、この「師弟感」は上述の遠隔教育システムの 3 つの成功要因に共通する通奏低音に他ならない。マニュアル知を伝授するとともに実践知を示唆する師を感じ、師とのつながりを実感すること、それこそが茶道における遠隔教育システムの意義であろう。

したがって、ICT を通じた人材育成の鍵は「師弟感（メンター感）を実感できるかどうか」にあると考えられる。それは、技術的基盤の優劣ではなく、むしろ組織的ないし制度的基盤の課題と言えよう。シリアスゲームや PBL が技術を基盤とするリアリティを追求しているのに対して、WEB 稽古は師弟感というアクチュアリティを体現しているのではなかろうか。ただし、遠隔教育システム単独で師弟感を醸成することは困難であろう。この点は今後の課題である。

参考文献

[1] Woods, D.R.（新道幸恵訳）『PBL：判断能力を高める主体的学習』医学書院, 2001.
[2] 藤本徹, 『シリアスゲーム』東京電機大学出版局, 2007.
[3] 柳原佐智子, 家元制組織における「Web 稽古」を用いた顧客関係管理と信頼関係維持, 日本テレワーク学会誌, Vol.10, No.2, 2012, pp.23-30.
[4] 福島真人, 認知という実践：『状況的学習』への正統的で周辺的なコメンタール,[10]の邦訳解説, pp.127-181, 1993.
[5] Dreyfus, H.L. & Dreyfus, S.E., *Mind over Machine*, Free Press, 1986.
[6] 福島真人『暗黙知の解剖』金子書房, 2001.
[7] 西堀栄三郎『創造力』講談社, 1990.
[8] Sullivan, G.R. & Harper, M.V., Hope is Not a Method, Times Business, 1996.
[9] 行岡哲男『医療とは何か：現場で根本問題を解きほぐす』河出書房, 2004.
[10] Lave, J. & Wenger, E., *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991（佐伯胖監訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書）.
[11] 内田樹『修行論』光文社, 2013.
[12] 堀内議司男『男子の茶の湯ことはじめ』原書房, 1994.

謝辞

本研究の遂行にあたって、遠州流茶道壷中庵宗長堀内宗長氏にはインタビューをはじめ、多大なるご協力を頂きました。ここに記して感謝いたします。堀内氏の活動については、次の URL を参照のこと。http://www.kochu-an.jp/ index.html　なお、本研究は、科学研究費補助金（平成 22～25 年度基盤研究(C)課題番号 22530358)、および、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 21 年度～平成 25 年度）の採択事業「データマニングのビジネス応用のための実践科学アプローチ」の支援を受けた成果の一部である。